

## 紹介

# 東北大学と浦項工科大学の 学生間研究・学術交流 プログラムにおける活動紹介

東北大学工学部材料科学総合学科：学部4年  
程 宏輝

東北大学工学部材料科学総合学科では、学生の国際活動の一環として、毎年韓国の浦項工科大学(POSTECH)との間で、学生間学術交流プログラムを開催しています。当プログラムは国際交流に積極的に参加する意欲のある学生であれば学年問わず参加できることが特徴となっており、低学年の学部生にとってもそれほど敷居の高くないプログラムとなっています。私は1年生でも参加でき、費用負担も少なく、何より実際に外国の学生との交流ができるという部分に魅力を感じ、このプログラムに参加することを決めました。本記事を通じて、私と同じように材料分野に携わる学生の皆様に、このプログラムを通して私自身が実際に得たもの、体験したことを共有させていただき、当プログラムの活動紹介のみならず、より多くの材料系の学生の皆様の国際参加を促す一助につながれば幸いです。

さて、このプログラムでは3泊4日程度の期間が設けられ、日程やすべてのイベントは学生が主体となって企画します。その中でも最も大事なイベントとなるのがプレゼンテーション交流会です。参加学生たちは半年ほど前からこのプレゼン本番に向けて準備を開始します(図1)。プレゼンテーションは班ごとにテーマを設けて行います。その際、1~3年生を混合させて班分けするため、プレゼンテーションを作る中で学科内での先輩、後輩のつながりが自然と生まれます。さらにそこに4年生が定期的に参加し、プレゼンテーションの手直しを加えながら仕上げていきます。些細なことですが、初めてのプレゼンテーションで、パワーポイントを使ったことがない下級生にとっては、ここで先輩からパワーポイントの使い方を教わるができるのも一つのよさです。

このプレゼンテーション交流会では、主に3つのテーマが設定されており、それぞれ研究・文化・ディスカッションというテーマに沿って行います。

研究班は東北大学で行われている研究に関連した英語論文を読み、その研究内容を発表します。その際、英語が母国語ではない学生が聴衆であることを考慮して、発表内容をわかりやすくイメージしてもらえようスライドの効果的な見せ方や発表の流れ、図や写真の配置などを工夫します。また、韓国側の発表を聞き、韓国では現在どのような研究が行われているかを知ることで、意外な視点からのアプローチに気づくこともあります。研究室に配属された4年生にとっては、自分達の研究と照らし合わせながら聞くと、より理解が深まります。

文化班は日本の文化を韓国の学生に紹介します。ここでは



図1 プレゼン発表の様子.

図2 POSCO 見学.

一つ一つの習慣や日本文化独自のルールについて丁寧に理由を示しながら説明するよう心掛けなければなりません。また、調査を進めるにつれて日本人でありながら知らなかった事実や伝統を再認識することもあり、自国への理解や愛着が思いがけず深まります。

ディスカッションの時間では参加者全員がばらばらに国籍関係なく即席グループに分かれ、ディスカッション班が提示したトピックについて意見を言い合います。そのためディスカッション班は全員が何についてディスカッションするかを事前に準備します。例えば、今年は「携帯電話の使用は何歳から認めるべきか」という問いが設定され、そのトピックについて参加者が話し合いしやすいよう背景や関連する統計データなどの基礎知識を提示します。このテーマでは研究・文化の発表とは異なり、最終的にはグループごとにトピックに対する結論とその結論に至った理由を発表しなければなりません。全員の意見をすり合わせ、最終的な結論をまとめるために、英語で自らの立場を明確にし、意見を簡潔に表現することが必須となります。単なる英語力のみならず、筋道立てて発言する能力が重要となり、私が初めて参加したときは言いたいことが伝えられないもどかしさで苦しんだことを覚えています。ここでの挫折と屈辱のおかげで、「次は英語で自分の意図を過不足なく伝えられるようになりたい」と帰国後も英語学習に対するモチベーションを高く持つことができました。

他にもこのプログラムでは、POSCOの工場を見学させてもらったり(図2)、韓国の学生に混じって日常生活を送り、文化の類似点、相違点を肌で感じたりなど、実際にさまざまな体験をすることができました。

私はこのプログラムに参加したことで、さまざまな気づき・学び・成長を得ることができました。その中でも特に自分自身が成長したと思うのは、外国人に対して過剰に意識することがなくなり、自然に接することができるようになったことです。今までは、言葉の壁を意識しすぎるあまり、相手が外国人というだけで頭が真っ白になることもありました。今では純粹に相手と楽しくコミュニケーションをとることができるようになりました。このコミュニケーション力は、今後の自分の交流の幅を広げる土台になると思います。最後に、このような有意義で濃密なプログラムの開催に対して、経済面も含めて毎年援助して下さっている東北大学材料科学総合学科の先生方および関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

(2016年2月5日受理[doi:10.2320/materia.55.171])

(連絡先：〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉6-6-02)